

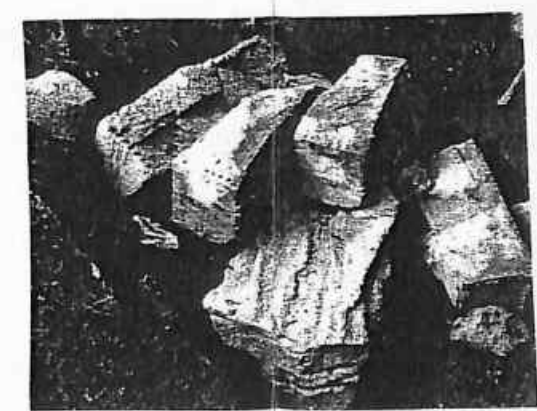
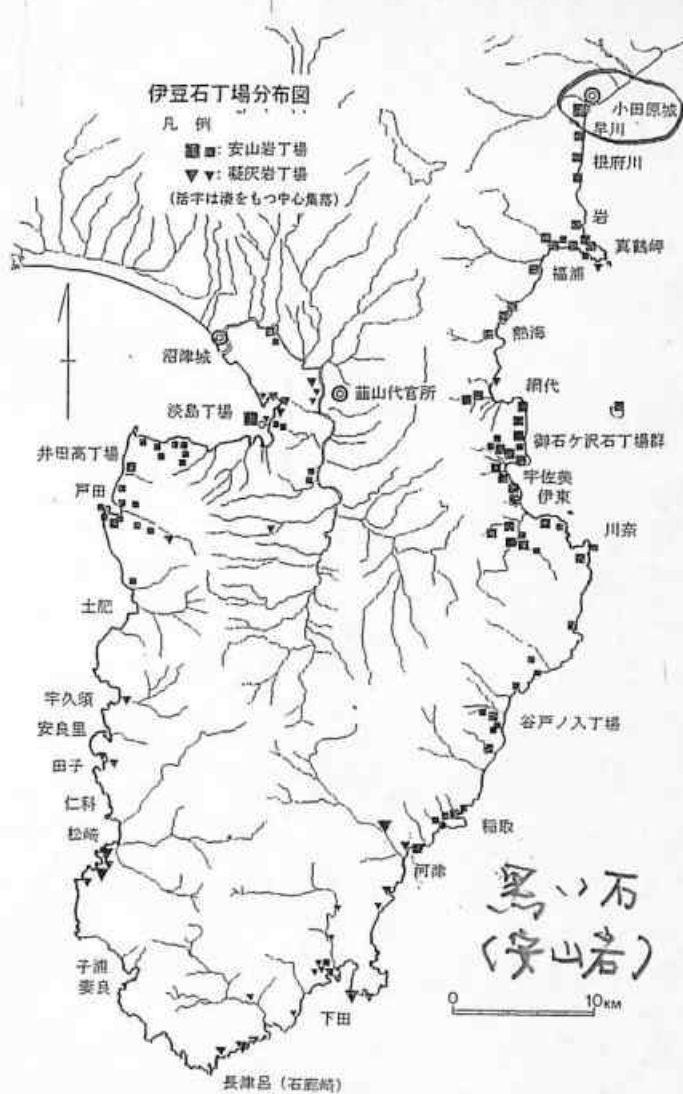
江戸城の大手門から平川門への東御苑コース 山岸弘明

江戸城最大の巨石=2の丸と本丸結ぶ中の御門

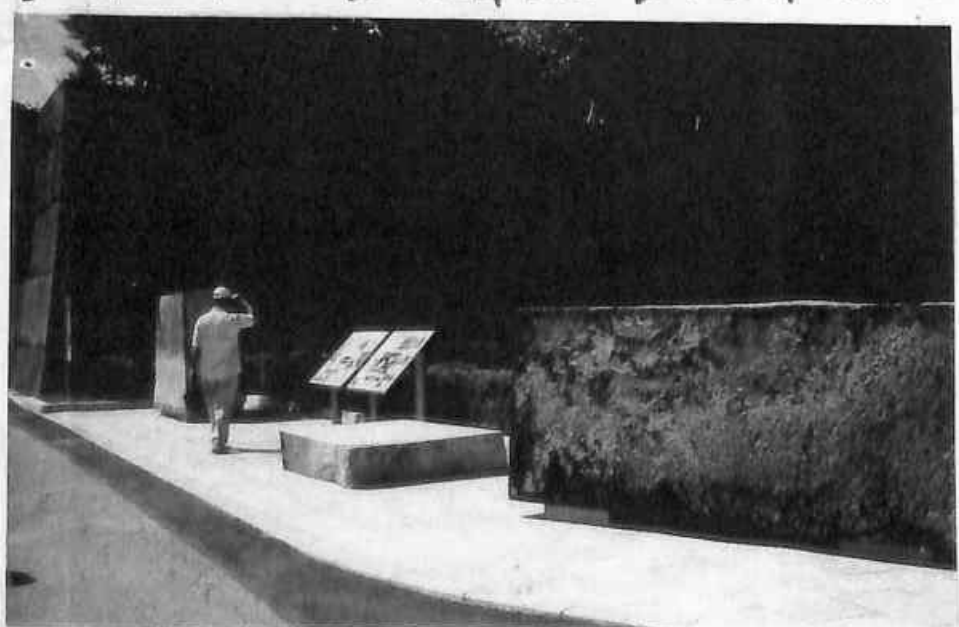
白石は瀬戸内小豆島、黒石は伊豆東海岸から運ばれた

5代将軍綱吉代に修復、最高技術を結集した江戸城最大の秀作

- 1) 中の御門
 - ①大手門から3つ目の正門、2の丸と本丸の間の門、本丸腰曲輪を守る
 - ②城中ここだけは升形でなく、水濠もない。中仕切り門、左折れ
 - ③渡櫓門、幅13間、奥行き4間
 - ④慶長12年藤堂高虎の縄張りで創建。明暦3年「明暦大火」で焼失。万治元年熊本細川綱利が再建。元禄16年「大地震」で倒壊。宝永元年鳥取池田吉康が修築
 - ⑤明治6年渡櫓門を撤去、周辺石垣は現存
- 2) 築石展示コーナー解説板
 - ①平成17~19年に行われた修復工事と文化財調査での取り替え築石を展示
 - ②断面図=地上6m地下2m、鏡石(後出)背面補強石組み、裏込めグリ石、盛土
 - ③ふかん写真=石垣は外側だけで内部は土
 - ④中に慶長石垣、万治は新しい石垣で覆う
 - ⑤築石は35t前後、江戸城最大級特別仕様
 - ⑥様々な遺物が出土した
 - (1)契(ちぎり)、(2)敷金=銅製
 - (3)大かすがい=銅製、鉄製
 - (4)金具による強化で大地震崩落を防止
- 3) 展示築石
 - ①黒石=伊豆東海岸の安山岩。昨秋見学の見学早川石切り丁場などから、はじめ白石、径年して黒く
 - ②白石=小豆島の花崗岩(角石)。破損部分を切断して展示
 - ③白石=小豆島の花崗岩(鏡石)。表面だけの飾り石。江戸城ではここだけ
- 4) 修復なった中の御門石垣
 - ①切り込みハギ、みごとな布積み。横目地、刻印は「天下普請」の象徴
 - ②渡櫓門=1階は通路、大御門、2階はガラントした空室、武器庫、非常時射場
 - ③石畳「せん」と門柱穴
 - ④ガンギ坂=櫓門2階や迎撃ザマへ
- 5) みごと、石垣完成期の傑作。安土城や小田原石垣山城は発展途上期、江戸城中の御門は完成期、築石、石積みなどに技術革新が(詳しくは別機会に)



昨年秋、早川石切り丁場



中の内築石展示コーナー



中の内竹の石写真

1-2
 修復用の巨石
 海路を運搬
 西国大名が負担
 夏の間で
 多数の残石

搬入の便利だった。全島では九地区に丁場跡があり、それぞれ普請大名が管轄した。岩谷地区には六つの丁場がある。その一つ、天狗岩丁場。急な小道を登ると切り取られた、高さが一畝余、長さも数畝もある花崗岩が散在する。最終的に加工する前の種石だ。その角には石切用の鑿の跡が切り口鋭く並ぶ。さらに登ると、五、六畝以上もある巨石が立ち並ぶ。天狗岩だ。その先に数十枚分以上はありさうな岩が横たわる。中央部にまっすぐ鑿で切り込んだ跡が残る。国道のすぐ海寄りには八人石丁場。高さ四畝余、長さ六・五畝の巨石があり、そばには同じ石が立っ。切り出し作業中に岩が真っ二つに割れ、八人の石工が下敷きになり死したと伝えられる。いまだに鑿跡が生々しい。この巨石八十、以上と推定される。

多数の残石
 切り出したものの大坂まで運ばれなかった残石も多数。この岩谷だけで千六百二十個を数える。岩谷の反対側、島の北西部にある

元高校教師で郷土史に詳しい中村利夫氏は「後ではなかなか進められないでしょう。団平船という底が浅く平らな船がよく使われたようです。当時、大坂・高松間は最速でも三昼夜かかったもので、石ならそれ以上かかったでしょう」と見る。機械がない時代、知恵と労力が巨石を動かしたのである。



石切り

大坂城石垣石切丁場跡
 江戸城
 「香川県小豆島町」
 No. 43
 日経

白い石(花崗岩)



徳川実成
 資料は情報がいっぱいですが後でゆっくり読んでください

鑿の跡がはっきり残る天狗岩丁場の種石

中の御内 (本丸)



中の御内

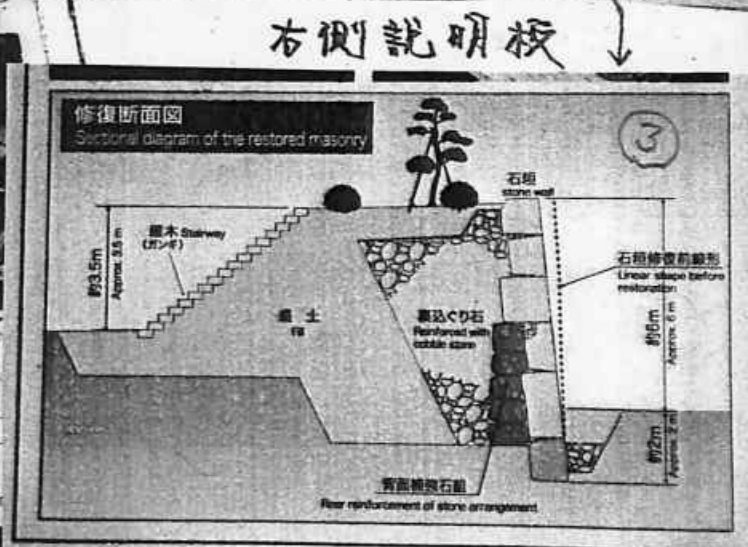


角石



門柱六

せん



右側説明板

石垣断面図

解体により明らかになった事実 Facts revealed by demolition work

江戸城普請年表 Chronology of the Edo Castle Construction

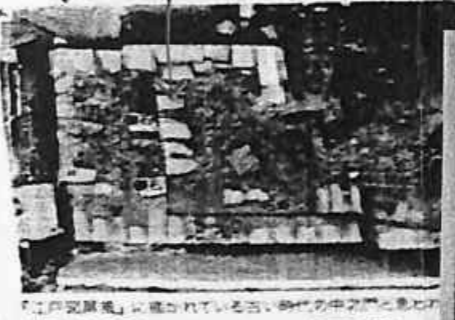
1590年(天正18年)	徳川家康江戸城に入る	1590 (Tenmei 18)	徳川家康が江戸城に入った
1600年(慶長5年)	関ヶ原の合戦	1600 (Keicho 5)	関ヶ原の合戦
1603年(慶長8年)	江戸幕府開府	1603 (Keicho 8)	江戸幕府が開府した
1604年(慶長9年)	家康、江戸城本丸(富士見御殿)の修築	1604 (Keicho 9)	家康が江戸城本丸(富士見御殿)を修築させた
1606年(慶長11年)	秀忠、本丸御殿、二の丸、三の丸石垣造営	1606 (Keicho 11)	秀忠が本丸御殿、二の丸、三の丸石垣を造営させた
1607年(慶長12年)	天守閣完成(第1期)	1607 (Keicho 12)	天守閣が完成した(第1期)
1622年(元和8年)	天守閣(第2期)を北に移す	1622 (Eicho 8)	天守閣(第2期)を北に移した
1636年(寛永13年)	江戸城の主要内丸完成	1636 (Kan'ei 13)	江戸城の主要内丸が完成した
1637年(寛永14年)	家光、天守閣(第3期)他の改築に着手	1637 (Kan'ei 14)	家光が天守閣(第3期)他の改築に着手した
1638年(寛永15年)	天守閣(第3期)改築完成	1638 (Kan'ei 15)	天守閣(第3期)改築が完成した
1657年(明暦3年)	明暦の大火(御地火事)、江戸城焼失 以後天守閣は再建されず	1657 (Meicho 3)	明暦の大火(御地火事)で江戸城が焼失した 以後天守閣は再建されなかった
1658年(万治元年)	江戸城の復旧工事 堀川氏による【中之門普請】	1658 (Manji 1)	江戸城の復旧工事が始まった 堀川氏による【中之門普請】
1703年(元禄16年)	大地震、江戸城被災、中之門倒壊	1703 (Genroku 16)	大地震で江戸城が被災し、中之門が倒壊した
1704年(元禄17年)	江戸城の修復 池田氏による【中之門修復】	1704 (Genroku 17)	江戸城の修復工事が始まった 池田氏による【中之門修復】

● 明暦3年(1657年)の大火以前の中之門の遺構が引上りました。現在の中之門は万治元年(1658年)に堀川清直・堀川綱利により再構築されました。



明暦の大火以前の【江戸城本丸】17世紀前半の江戸城(部分)。江戸幕府の中心地として栄えた。江戸幕府の中心地として栄えた。江戸幕府の中心地として栄えた。

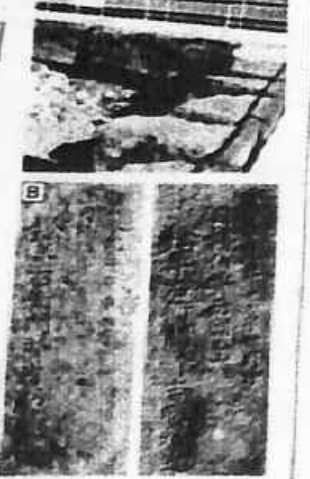
● 江戸城本丸(富士見御殿)の修築に際して、堀川氏による【中之門普請】が行われた。この普請は、江戸城の主要内丸を完成させた。江戸城の主要内丸を完成させた。



【江戸城本丸】に修められている古い時代の中之門と見られる。江戸城本丸(富士見御殿)の修築に際して、堀川氏による【中之門普請】が行われた。

● 元禄16年(1703年)に発生した大地震により壊れた中之門を宝永元年(1704年)池田吉泰(幼名松平右衛門督吉明)が修復した。修復した。修復した。

⑤ 解体遺物



宝永元年(1704年)池田吉泰(幼名松平右衛門督吉明)が修復した。修復した。修復した。



この展示スペースでは、中之門石垣修復時に交換した石材の展示を行っています。修復時に交換した石材の展示を行っています。

中之門石垣解体に伴い、様々な遺物が出土しました。様々な遺物が出土しました。



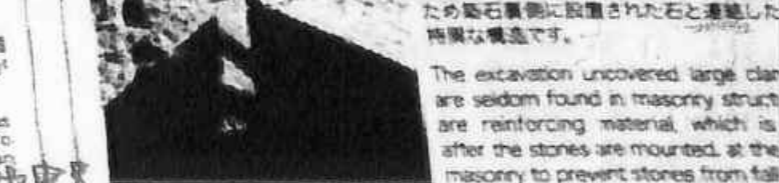
銅製敷金 Copper support

● 銅製敷金(銅製)及び石垣の据え付けに使用した敷金(銅製)が、約800点(約800点)修復石垣全体から出土しました。

● 銅製敷金(銅製)及び石垣の据え付けに使用した敷金(銅製)が、約800点(約800点)修復石垣全体から出土しました。



石垣構造としてはたいへんめずらしい大目が出土しました。これは、石垣のため石垣側に設置された石と連結した特殊な構造です。



The excavation uncovered large clars are seldom found in masonry struct are reinforcing material, which is after the stones are mounted, at the masonry to prevent stones from fall

本丸中の御内 石垣説明パネル

- チギリ = 連結
- 敷金 = 据え付け
- 大かすが = 連結

左側説明板

○マークは説明の順序です

中之門石垣の築石は、35トン前後の重量を持つ江戸城内でも最大級の石が使用されています。

The Nakanonon Gate stonewall consists of stones weighing around 35 tons, which are the largest size stones used in the Edo Castle masonries.



中之門石垣の特徴である、表面が広く奥行が浅い築石です。(縦向き)

展示石(瀬戸内産花崗岩) Exhibit: Granite from Setouchi



中之門石垣の特徴である、表面が広く奥行が浅い築石です。(縦向き)

This is a stone with a wide surface and short depth, which is predominantly used in the Nakanonon Gate stonewall.

展示石(瀬戸内産花崗岩) Exhibit: Granite from Setouchi



角石の破損部を切断した石で、母石は中之門石垣の中で最大級の花崗岩です。(縦向き) C

This is a piece of stone cut off from the crushed portion of a square stone, the base stone of which is among the largest size in the masonry of Nakanonon Gate stonewall.

展示石(伊豆半島産安山岩) Exhibit: Andesite from Izu Peninsula



傷により交換した築石です。安山岩は花崗岩に比べ節理が発達しており大材の採取が困難です。

This stone was replaced because it was scorred. Large andesite is difficult to obtain because it has more joints than granite.

右石垣下段左側

左右段下の方

右石垣上の方の中

石切丁場遺跡

江戸城の石垣の大半は、伊豆半島から運ばれた石材で築かれています。伊東市内にも三百数十年前の江戸時代初期に江戸城の天下普請に動員された大名たちが残って石切作業を行った痕跡が多数残されています。これは、その代表的な史跡のひとつである宇佐美の「御石ヶ沢」の山中にある角石（左）と富士海岸の石材（右）で、どちらも四メートルに達する大きなものです。「角石」は石垣に組まれた時に角に配置される重要な石で、四角に整形されて運び出そうとした形跡が残っています。富士海岸の石材は地元で「元船石」と呼ばれてきた巨石で、分厚い板状に割ろうとした痕跡が残っています。作業の際にかけられた穴（矢穴）が見えています。このように伊東市内の山中や海岸からは江戸城の築城のために石材を切り出した史跡が数多く残されているのです。

伊豆石丁場遺跡の重要性-伊東市史編集委員長 坂詰秀一

江戸城の築造に用いられた石材の採石場が伊東を中心とする伊豆東海岸の地域に存在していることは、古くから知られ、その重要性について各方面から注目されてきました。近年、小田原において江戸城石垣用の採石場が発掘され大きな話題となっています。慶長八年（1603）から修築工事が着手された江戸城は、四里に幅をめぐらし、およそ百万個の石材を用いた石垣で囲まれていました。その石材は、伊豆半島から海路、江戸に運ばれ、石垣をはじめ江戸の各所の構築に使用され「江戸城の石垣は伊豆石」と言われてきました。伊豆石は伊豆半島の東海岸をはじめ、狩野川流域・北西海岸などの石切丁場（略して石丁場＝採石場）から供給されたものですが、なかでも東海岸の石丁場が規模も大きく中心的存在でした。伊豆東海岸石丁場群と称されている地は、多く伊東市に含まれていますが、東伊豆及び熱海・真鶴岬の近くまで及び、そこで採石される伊豆石は「伊豆堅石」と呼ばれている安山岩です。

伊東市の「宇佐美北部」「宇佐美中部」「宇佐美南部」「湯川山」「大平山説」「小川沢」「新井」「川奈」「岡・吹須美」「鎌田」「富士」などには、石丁場の遺跡がみとめられます。これらの石丁場には「羽柴越中守石場」「竹中伊豆守」「松平宮内少石場」などの「刻文」、100種類以上の「刻印」が確認されています。「刻文」「刻印」の検討から、西国の諸大名が築って江戸城の天下普請のための石材を加工していたことが判ります。これらの石丁場は、慶長年間から寛永一三（1636）年にかけて、さらにそれ以降も開発されていたことが明らかです。これらの石丁場遺跡については、建築史の城戸久さんの先駆的研究もありましたが、石丁場の存在を丹念に歩き調査して、その状態を明らかにしたのは地元の森山俊英氏や鈴木茂氏をはじめとする郷土の歴史を研究する人達でした。鈴木さんたちの努力は、その後、市の教育委員会の分布調査の基礎となりました。現在、石丁場の遺跡は、それぞれ地蔵上からの観察と残されている地名（御石ヶ沢・割石・元船石など）や

藤堂高虎が設計者となった江戸城の築城は、大規模なものは慶長八年（1603）に始まり、寛永十三年（1636）頃まで、数度の天下普請として続けられます。後半の寛永年間天下普請には松平姓を名乗る親類大名たちも盛んに動員されますが、初期の慶長年間に動員された大名たちは西国の外様大名たちが中心でした。宇佐美のナコウ山の頂上にある大きな石に刻まれた銘文には「羽柴越中守石場」と刻まれています。羽柴越中守とは、千利休の高弟で茶人としても有名な武将細川忠興のことで、豊臣家との関係から羽柴姓を名乗ったまま徳川家の天下普請に参加しているのです。細川忠興は自分の領国では巨大な石垣の上に天守閣をもつ城を築いていますが、自分の領国でこういう城を築きつつ、一方で徳川家との付き合いから江戸城、大坂城、名古屋城と次々に巨大な築城工事をこなしていたことになり、

では、具体的に伊東市にそうした大名たちが残した足跡があるのでしょうか？宇佐美のナコウ山の「羽柴越中守石場」という銘文も具体的にそうした大名の丁場（現場）があったことを示しています。鎌田の道徳院にある大石には「これより南 竹中伊豆守」と刻まれています。竹中伊豆守は、豊臣秀吉の軍師として有名な竹中半兵衛の子孫と推定されます。また、川奈と新井の境の中には「これより北みなミ いよ松山石は」と刻まれた石が残っています。これは、西国の松山藩主となった松平家の石丁場の範囲を示す石です。同様に、宇佐美の御石ヶ沢には「松平宮内少石場」との銘の石もあります。こうした例から、江戸時代初期の慶長年間から寛永年間に滞在した大名たちは、内など伊豆の各地に、自分の石垣普請に使う石材を切り出すための丁場を確保していたことが石に刻まれた文字史料で確かめることができるのです。これらの石は、そうした歴史を語る証として非常に重要です。

石に刻まれる刻印

江戸城の石垣の表面を良く観察すると#・中・口・マなどのいろいろなマークが刻まれていることに気づきます。こうしたマークは「刻印」と呼ばれていて、天下普請で造られた城の石垣には、よくみられるものです。これらの刻印の意匠にはさまざまな変化があり、伊東市内だけでも120種類ほど確認されています。同じ姿の刻印が、伊東でも江戸城でも見つかりますので、伊東から運ばれた石で江戸城の石垣が築かれている証拠でもあります。一方で、それぞれの刻印の形が何を意味しているかは、へん興味深いものです。

例えば、富士海岸の石には数字の二と口を組み合わせた刻印が見えています。これは、毛利家の家紋である一品を省略した形と言われている。他にも刻印に使われる意匠には巴文、菱形、花、口などが多く、こうした意匠は家紋に通じるものが多いので、何らかの約束のもとに動員された

大名の家ごとの違いを意味するマークとみられます。しかし、数字やひらがなの一文字など家紋とは呼べない意匠の刻印や幾つかの刻印の組み合わせが、ひとつの石やひとつの丁場内に残されている事例を考えると、単純に何家の刻印はこれであるという決定的な決め手は未だないというのが現状です。右図は、伊東市内で確認された刻印の種類を示してあります。

このように市内には海岸にも山にも谷にも多数の刻印が積み込まれた石が残されており、三百数十年の間、江戸城に運ばれるために準備された刻印が執られたまま残っているのです。市民のみならずこの刻印の謎についていろいろと考えてみると面白い仮説が出来るかもしれません。「石引き道」の伝承、さらに船着場の推定地点などから調査研究が行われてきました。これらに加え、鉄掘棒・ノミなどの鉄製工具の製造修理の遺跡、作業に従事した人達の工房・住居などを明らかにすることも必要になってきます。

このように見えてきますと、伊東市の石丁場遺跡は、江戸城との関係においてのみでなく、日本の近世における技術・文化・経済をはじめ舟運などの実態解明にとって、きわめて重要な史跡であると言えることが出来ます。伊東市史編集委員会としても、市史の編集事業にあたって、石丁場の究明は、大きな眼目となっています。伊東市の誇る石丁場の史跡は、市にとっては勿論のこと、静岡県、さらに日本の近世史を考えるうえに貴重な文化財として、長く後世に伝えていくことが必要です。伊東市を挙げて、石丁場の遺跡を学術的に調査することによってその価値が改めて認識されてくることは明らかです。市民の皆様のご理解とご協力を願ってやみません。

石切丁場遺跡とは何か

伊東市内には、いたるところに石切丁場遺跡があります。これらの遺跡は、多くが江戸城を築く際に石垣用の石材を取るために開かれたもので、たいへん重要な意味のある史跡で豊臣秀吉による天下統一の最後の敵となった小田原の北条氏が天正十八年（1590）四月から七月の籠城戦の後に滅びると、秀吉は徳川家康に対して国替えを命じます。このため家康は、この天正十八年を境に三河の本拠を捨て、江戸に本拠を構えることになるのです。以後二百数十年の間、江戸は日本の政権の中心として栄え、十八世紀には世界有数の大都市となったと言われます。江戸・東京には地質的に殆ど石材というものがありません、しかし、徳田信長の築いた安土城の段階から城には巨大な石垣が構えられる時代となっていました。そこで徳川家康は、諸国の大名たちを動員して石のない江戸へ大量の石材を海上輸送させる天下普請に着手したので、

江戸に運ぶ大量の石材の産地として真鶴岬周辺から伊豆東海岸、伊豆北西海岸など広大な範囲が指定されました。そうした大量の石材を運ぶために家康は、まず、石材を輸送する石船の建造から着手させます。下命された大名たちは、船・石材・人員などを「献上」することで徳川政権への忠誠を示すように努めます。慶長十年（1605）に石船の建造を命じられた浅野幸長は、三百八十五艘という膨大な数の石船を献上したと記録されています。このように大動員態勢をとった江戸城の築城は、大まかにいうと関東・東北の諸大名は堀を掘って海陸を埋め立てる作業を分担し、西国大名は石垣を築くことを中心に分担しています。戦国乱世を生き残ってきた諸大名たちは、天下を取った徳川家の居城を築くのに根こそぎ動員されたのですが、そのような建設・土木工事を「天下普請」とか「御手普請」と呼んでいます。天下普請で築かれた城には「大坂城」「名古屋城」などいくつかありますが、なかでも江戸城は史上最大の城郭であり、日本の歴史に与えた影響もたいへん大きいのです。



大名たちの足跡

動員された大名たちは具体的にどう動いたのでしょうか。『徳川実紀』という記録には慶長十五年（1610）に名古屋城の天下普請に動員された福島正則が同僚大名たちに「江戸城、駿府城と続けざまに動員されて諸大名は疲弊している。しかし、これまでは天下の府城であるから苦勞とも思わないが、今度の名古屋城は徳川御所様（家康）の城ではなく、庶子の居城ではないか。なぜそこまで厳しく動員されるのか。なんとかならないものか」とこぼしたそうです。これを聞いた加藤清正は「もし、不満があるのなら、他人に譲るまでもない。さっさと本國に帰って戦の準備をされるが良い」と突っぱねたとあります。猛将として知られる福島正則ですが、彼の弱音が届くように、たび重なる動員は大名たちの財力や家臣たちの行動にも深刻な影響を与えたことでしょう。しかし、天下を取った者にとって、天下普請による築城は競争相手を手厳しく動員して疲弊させ、自らの地歩を強固にしつつ、万民にもその権威を見せつける絶好の機会だったのです。

矢穴を残す石

不規則な形をした石を石垣の材料として適した形に割るためには「矢穴」と呼ばれる四角い穴を石材に掘り込み、その中に「矢」と呼ばれる楔のような形の工具を打ち込んで石を割ります。江戸時代初期の矢穴は大変大きいものですが、江戸中期以降には急激に小さな矢になってしまいます。宇佐美の御石ヶ沢の山中に残された矢穴のあけられた石材には二種類の大きさの矢穴が見えています。コの字形の凹部の連続が古い穴で、それと直交する方向で後世の矢穴が二箇所、開けられています。石には「メ」と言われる方向性がありますので、それをうまく利用しながら矢穴を配置しています。この石の場合も、メの方向どおり矢穴が配置されていますが、後世に割ろうとした方向にはうまく割れなかったために江戸に運ばれずに山中に残されたものとみられます。

運ばれる石材

山中で形を整えられた石は、石引き道をたどって海岸まで運び出され、船に乗せられます。石は大変な重量がありますので、棒で呼ばれるソリのような道具が使われたりしますが、機械のない時代ですから、人海戦術で多数の人員が搬出に関わります。こうした運搬作業には九州や四国など各地の大名領から動員された何百人もの人々が関わっていたとみられます。今、伊東の山中には石引が行われたとみられる道の跡も見事に残っています。海岸に運ばれた石材は、大きさなどを検査された後、大型の船に積み込まれて江戸へ運ばれます。当時の記録には、石船は「三千余艘」に及び、石材価格は「百人持の石は銀二十枚」「ごろた石は一箱金三両」と定めたと記されています【当代記】。石材は重量物ですから、船の中の積み込み位置が問題だったようです。伊豆の名主たちは、石船の下積みの「割木」の調達を大名たちから依頼されていることが地元の古文書で確認できます。また、三浦半島一帯には、伊豆から運ぶ途中に石船が溺した石材が今でも沿岸に点在しています。こうした石の由来を証明するかのよう、慶長十一年（1606）五月には船島根津守をはじめとした大名たちの石船二百艘近くが一挙に暴風のため転覆したという大事故が起きたことが記録されています。

伊東の石丁場遺跡の特徴

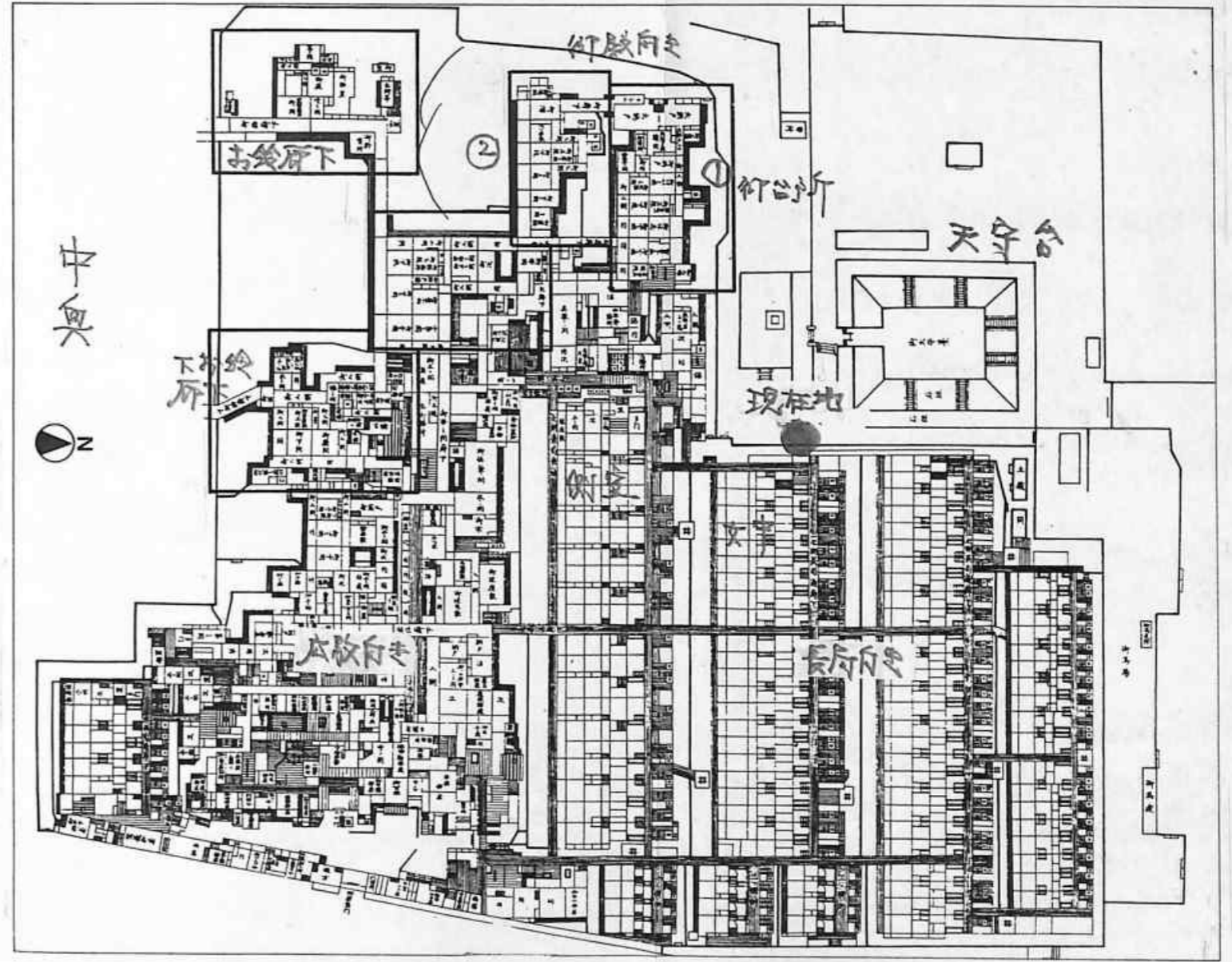
伊東市内の山中に残る石切り場遺跡は、「石場預」という役職者が各藩から任命されて、幕末段階まで江戸城の普請再開に即応できるように石材と石引き道を管理していたことが最近の研究で判明しました。石場預は、他ならぬ私たちの先祖が押命して二百数十年の長い期間、石丁場の維持を行って来たのです。この結果、丁場によっては現在でも数百に及ぶ石垣用の石材が山中に整然と並べられた状態で残されている場所もあります。このように古い時代の姿がそのまま残されていることが伊東の石丁場遺跡の重要な特徴です。もうひとつの特徴は、史上最大の城である江戸城の石垣普請の様子を具体的に確認することができるという点。さらに、江戸時代という大海運時代の幕開けにふさわしく江戸との間を海運で結んだ大量輸送が行われたという特色もあります。

大坂城に石材を運んだ事で知られる瀬戸内の小豆島の石丁場遺跡跡は、国指定史跡とされて往時の姿が保存されています。江戸城自体は既に昭和三十五年に特別史跡に指定されています。伊豆の石丁場遺跡は江戸城の諸遺構とともに考え合わせると、日本の歴史や文化を考える上で欠くことのできない史跡と位置付けることができます。市史編さん事業では、こうした石丁場遺跡の調査を本格的に行う予定です。市民のみならずの積極的な協力をお願い致します。

篤姫と皇女・和宮＝幕末の動乱に翻弄された2人のヒロイン

- 1) 江戸城本丸の歴史は火事との戦い
 - ①本丸（大奥も）は5度焼失、7回建造された。
 - ②江戸前期明暦大火後、万治2年建造の本丸は185年続き天保15年に焼失。
 - ③篤姫が入った本丸（大奥）は弘化2年建造、14年後の安政6年焼失。
 - ④最後の本丸は万延元年建造、わずか4年後の文久3年焼失。以後再建されることなく本丸機能を西の丸に移した。
- 2) 「かんしゃく公方」病弱だった13代将軍家定
 - ①江戸後期文政7年、12代将軍家慶7男に誕生。父急逝にともない、ペリーの来航、開国要求で、攘夷、開国の内外政争鳴のなか将軍職につく。
 - ②病弱で奇行が多く「かんしゃく公方」の別称も。政治は阿部正弘以下の幕閣に委ねられた。
 - ③安政5年没、毒殺説もある。35才。上野寛永寺葬。
 - ④後継将軍は早くから一橋慶喜と紀州慶福（家茂）が争ったが、大老井伊直弼の工作で家茂に決まる。
 - ⑤しかし家茂も幕末激動の中2年で急死、慶応4年15代将軍慶喜が鳥羽伏見の戦いで敗れて江戸幕府は崩壊した。
- 3) 篤姫（敬子、篤子、天璋院）ドラマストーリー
 - ①江戸後期天保7年、島津忠剛の娘として誕生
 - ②将軍後継騒動の渦中、一橋慶喜を擁立する薩摩藩主島津斉彬の養女となり、安政3年近衛忠ひろ養女をへて家定の後室に迎えられた。
 - ③家定は健康にすぐれず、夫婦は名ばかりで子宝に恵まれない。この間、慶喜、紀州両派の後継争いが激化、大奥は権謀が渦巻く。

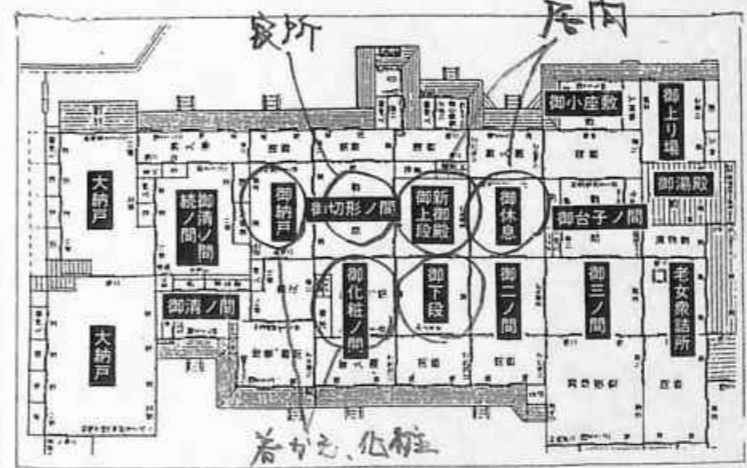
- ④2年後の安政5年夫家定が逝去、落飾、後継将軍家茂の養母として江戸城に止まる。
 - ⑤文久2年家茂に皇女和宮が降嫁すると、篤姫（天璋院）は御所風に反発、大奥は再び緊張した。
 - ⑥朝廷からの異議で天璋院は2の丸に退去、2年後に家茂が出陣中の大坂で急逝すると、和宮の押す慶喜に対抗して田安亀之助（家達）を擁立した。
 - ⑦慶応4年の新政府軍の江戸進攻では、この両者が徳川家の存続に腐心し、開城の時、家定の生母本寿院とともに一橋邸へ移った。
 - ⑧明治維新以後は徳川宗家を継いだ家達の養育に専念、晩年を徳川公爵邸で送った。明治16年没、享年48才、寛永寺に眠る。
- 4) 篤姫と和宮が入奥した江戸城大奥
- ①本丸天守台周辺が旧大奥、本丸1万1千坪のおおよそ60%にあたる6千坪を占めた。
 - ②常時1,000人から3,000人。幕府全経費（国家予算？）の3分の2を消費、苦しい財政を圧迫した。
 - ③御殿向き＝御台所居所
長局向き＝側室と大奥女中居住
広敷向き＝大奥役人（ここだけは男子）の執務所
 - ④新御殿御上段、御下段、御休息の間＝御台所居間
御切形の間＝寝所
御化粧の間、御納戸＝着替え、化粧
御座の間上段、御下段＝公式の対面所
 - ⑤お鈴廊下＝中奥と大奥を結ぶ将軍専用通路
 - (1)総触れ＝朝四つ（10時）御目見え以上を謁見
 - (2)奥入り＝休憩。普通八つ（14時）小座敷でお茶
 - (3)奥泊まり＝夜五つ（20時）



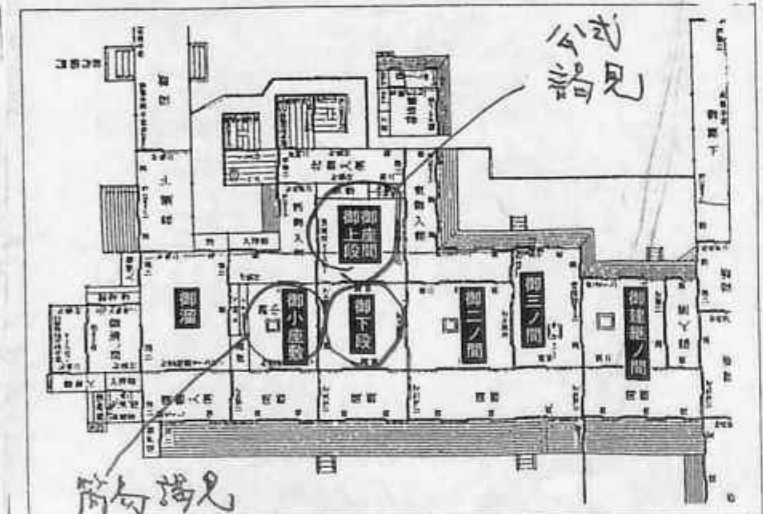
篤姫や和宮当時、江戸城大奥



大奥跡



② 御台所居間



① 御台所公式の場



「大河ドラマ」篤姫。島津斉彬（高橋英樹）と
 ← 左から①将軍家定、②天璋院、③和宮、④大河ドラマ篤姫（宮崎あおい）